

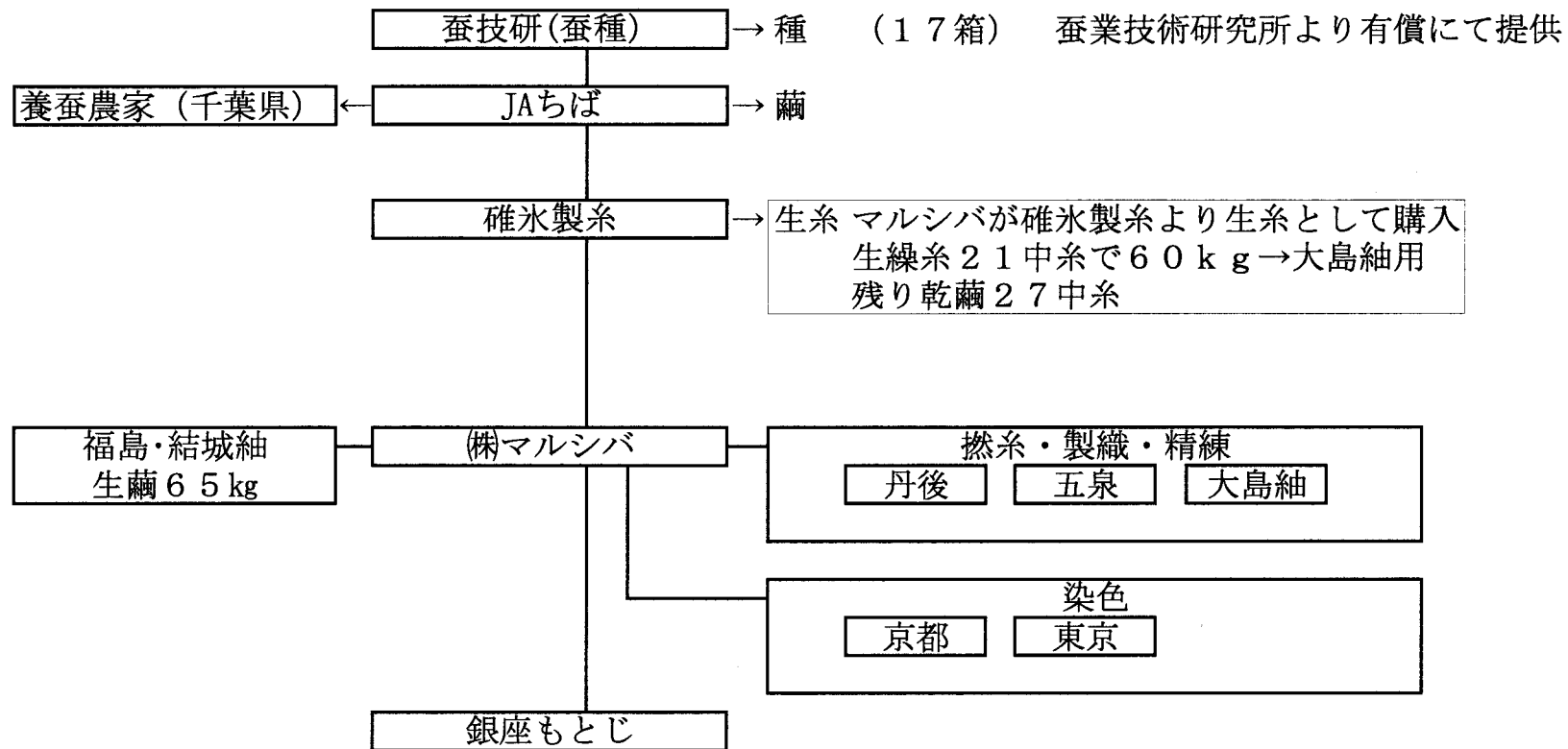
雄蚕品種 プラチナボーイ提携システム

株式会社 マルシバ 木下幸太郎

①提携システムについて

提携システム全体の体系図

平成18年度体系予想図



※カッコ内の数値は平成18年度の生産予定量

◎提携システムアドバイザー

大日本蚕糸会
日本絹業協会

②システムの概要

マルシバは創業以来呉服の白生地を主力商品として考えており繭や生糸の研究を重ねてまいりました。一昨年大日本蚕糸会より蚕業技術研究所の大沼博士が長年にわたって研究した雄蚕品種(プラチナボーイ)の開発に成功した事を聞き、男のキモノの第一人者である「銀座もとじ」に伝えました。そして種から養蚕、製糸、製織までの一貫したこの事業に対する賛同を得ました。その後、大日本蚕糸会を通じて全農に協力を要請したところ快諾を頂きました。具体的に養蚕農家を斡旋して頂く為にJAちばの協力を得ました。また、全農からは碓氷製糸に製糸を要請して頂きました。製糸以後の作業は弊社における通常の業務であり、「銀座もとじ」との取引を含めて支障をきたすものはありません。こうしてシステムの大まかな全体図は出来上がりました。これは、関係各団体および担当者様の養蚕農家の問題を含めた現在の蚕糸絹文化に対する危機感と御理解よって成しえたものと確信しております。

雄蚕品種であるプラチナボーイの特性を活かした男物着物関連製品(オリジナルブランド)を効果的に製造販売するためには、生産者履歴を明らかにすることによって消費者の信頼を勝ち取ることが重要であると考え、このため、養蚕・製糸から最終製品・販売までの提携システムを構築いたしました。又、継続的な開発およびシステム作りのために3年間の連続開発を提唱いたしました。これは関係団体および養蚕農家に対する保証と責任となると考えております。

プラチナボーイは雄だけの繭であることから繭のそろいが良く、非常に強くしなやかな生糸を生み出します。又、養蚕農家にとっても育てやすい繭であるという声を聞いています。日本の絹として一番良質な部分を抽出した絹であるという事が出来ると考えます。また、「日本の絹マーク」の生産者履歴を追加表示することで日本の絹マークに恥じない絹製品が出来上がるものと確信しております。

③今後の課題方向性

現在プラチナボーは千葉での養蚕を終え、碓氷製糸で製糸の作業に入っています。これよりいよいよ製織そして発表販売となります。ここにいたるまで丸2年の歳月を要しました。いまだに発表までは半年以上の時が必要ですが、ここまで来られたのは関係者各位の誠実な努力と深い理解があつての物であることをご報告させていただきます。又、次年度に向けてプラチナボーイの更なる開発を関係団体に要請中です。種の改良、養蚕段階での実験、製糸における様々な工夫、撚糸・製織では生糸の特性を生かした製品作り、などそれぞれの部門での研究を継続してゆく予定です。

現在の養蚕農家を含めた蚕糸絹文化を考えた時に、種から製品までの一貫した事業形態は非常に重要なポジションであること認識するのは容易なことです。それは消費者に一番わかりやすい形で良質な製品を提供出来るからだと考えております。また長く危機的な状況の続く呉服業界においてもそれは大変に有効で意味のあることと認識しております。それらのことを踏まえてマルシバといたしましてもプラチナボーイでの経験を元に種から製品までの一貫したチーム作り、製品作り今後も引き続き弊社の事業の中での柱として考えてゆく所存です。

「銀座もとじ」より

- * 消費者にとって製造過程というものはものづくり路線である。全ての履歴が確認できることへの信頼感、作り手の顔が見え手の温もりを感じられ安心感を得ることができる。
- * 「銀座もとじ」という小売屋が商品開発に携ることにより、消費者ニーズに答える商品を届けることができる。専門的な観点からみても純国産の高品質な糸が改めて評価されることは養蚕農家の向上及び意識改革を促すことができる。
- * 「男のきもの」を発信してきた銀座もとじにとって雄の蚕から生み出された絹糸は最高の条件でありストーリー性も将来性もあり、より特化した男のための商品ラインを取り揃えることが可能となる。
- * 極上の素材は勿論のこと、それをを用いて生み出される結城紬・大島紬・お召し・袴の商品は銀座に店舗を構える弊社にとって海外の一流ブランドにも負けない手仕事による商品である。
- * 国際社会の中で日本の誇りをいかに提示し生き残るかという課題は伝統文化に全ての業種のテーマでもある。それをいかに捉えるかでこの課題はまたとないチャンスにもなる。銀座もとじは進化しつづける伝統を目指したい。
- * プラチナボーイは正に現代の科学技術の発達により生み出された優勢の蚕であることから、明るい未来を象徴するきもの文化のシンボルと信じております。その思いは銀座もとじの精神そのものなのです。

多摩シルクライフ 21 研究会の活動

多摩シルクライフ 21 研究会 小此木 エツ子

1. 多摩シルクライフ 21 研究会の発足

当研究会は、現在の国立大学法人東京農工大学が、平成 4 年秋、地域との連携をテーマに、「科学技術展' 92 および絹まつり」を開催した際、そのイベントにご参加、ご協力下さった養蚕、製糸、精練等の素材研究家、絹伝統工芸、染織家、デザイン、縫製の専門家をはじめ、流通業者、一般の絹愛好家の皆さんが、その時の活動を引き続き続けておりましたのに感銘し、当時東京農工大学に在籍していた私が中心となり、絹の総合的開発と研究を目指す研究団体として、「多摩シルクライフ 21 研究会」の名をもって組織化し、平成 7 年に正式に発足した研究会です。

活動内容は大きく分けて次の三つがあり、一は東京ブランドシルク事業、二は生涯学習、三は各種絹加工技術等の開発研究である。

2. 活動内容

1) ブランドシルク事業

まず、この事業の特徴とするところを、これまでの実績をもとにご紹介する。

私ども研究会のブランドシルクづくりの姿勢は、つくろうとするものに向けて、素材から最適な加工条件を組み立ててつくるということである。

即ち、素材は日本の風土が生み出すもの、すなわち国産系の中の、主として東京多摩地域でつくられた繭を素材として使っており、作品づくりに当たって、蚕種、養蚕、製糸、燃糸、精練等、異業種間の連携を重視している。

次に、私どもが主に採用している加工方法を示す。

現在、東京では八王子を中心とする 8 戸の養蚕農家が、現行品種を年間約 1 トン生産しているが、当研究会では、その中の約 800 kg を買い上げ、それに特殊品種を合わせて、約 1 トンの東京産繭を製品化している。

特殊品種は、青熟交配種、四川三眠交配種、小石丸が主な蚕品種であり、養蚕に携わる研究会員は近年の養蚕法によらずに、掃立から始めて、全齢、桑による飼育を行ない、約 15.0 kg の優良繭を生産している。

製糸は、生繰り繰糸法を採用し、それに、織度別繰糸、扁平であるとか節糸であるとかというような形状別繰糸もあわせて採用している。

燃糸は八丁式湿式燃糸、乾式合燃糸、それに、現在では全国でも 2~3 か所しか残っていないと思われる多摩の張り燃り燃糸も採用している。なお、張り燃り燃糸は、手術縫合糸やポピンレース、刺繍糸などに供する絹糸の生産に用いられている。

精練は、灰汁練りの他、選択的精練が可能な合成灰汁練りを採用している。

製織法は、一染、平織、紬、緋、風通、錦、羅、もじり織り、花織り、畝織り等、多種多様であり、会員が目的の作品に合わせて選択して織り上げている。

白生地は、機業地京都の業者と連携して、各種ちりめんを製織している。

染色法は、草木染め、友禅、江戸小紋、板締め、型絵染、藍染め等を用いている。

組み紐は、綾竹組、籠打組、その他一般の高台や丸台、角台を用いて製品をつくり上げている。

以上のような加工条件の中から、会員自身がつくるものに向けて素材から選択し組み立てて、多様な製品をつくり上げていくのであるが、特に、東京産の繭を 50% 以上使用し

た製品には、「東京シルク」の名を付したラベルを付けて区別をしている。

「東京シルク」に用いる生糸に総じて云えることは、生繰り糸であるということである。生繰り糸は純白で美しく、加えて、極力偏繰を避け、繰糸速度を緩速にしているため、糸はふっくらとした、ふくらみと弾力のある糸である。

また、東京シルクは糸に透明感があり、染色性にも優れており、でき上がった絹製品は、手触り、光沢が美しく、特に着用性能には定評がある。

2) 生涯学習

当研究会は、発足以来、養蚕、製糸、染織、そして最終製品に至るまで、日本の風土に根ざした技術の組み立てを重視する、正にこだわりのものづくりに取り組んで活動しているが、加えて、日本の古くからの伝統を継承すると共に、その技術の普及にも努めて活動을續けて、現在に至っている。

生涯学習は、蚕糸技術普及の一環として、研究会で特に力を入れている活動の一つである。

当研究会では、平成11年から、主に東京都内の小学校の理科教材としての蚕種の配布を東京都農業試験場より引き継いで来たが、当初130校だった小学校が、160校を超えるまでに増えた。

その後、それら配布校の間で、新しく始まった小学校総合科目授業で、繭からの糸づくりや製品づくりにも取り組みたいという要望が出て来たため、東京農工大学にも協力して戴き、毎年夏休み期間を利用して、蚕種の配布校の中から希望の先生方約50名を集めて、教室を開き、「蚕の飼い方、繭からの糸・絹づくり」その他について勉強をして戴いた。

その教室が小学校にとって大変有意義であることから、毎年、大好評を戴き、その後、その参加校の要望にそって、小学校個別の総合科目授業にも参加している。

小学校児童の蚕糸に対する関心は非常に高く、各学校とも、総合学習としての成果が上がっているため、先生方から大変喜ばれている。

2番目は地域の資料館、博物館での体験学習への企画からの参加である。この活動は、八王子市に繭・糸等素材づくりから始める機織り伝承館をつくらうとの話に発展しつつある。

3番目は染織家、一般絹愛好家を対象とする市民のための素材づくり学習会の開講である。受講者は非常に熱心に学習しており、今、多摩地域では一種の手仕事ブームが起こりつつある。

次に小学校や一般市民を対象とする学習について概要をご紹介します。

(1) 小学校での蚕糸・絹づくりの学習

過去4年間に、延べ51校の小学校に出向き、約3300名の児童が、総合学習の一環として蚕の飼い方を体験し、繭からの糸・絹づくりに参加したが、小学校の総合学習を行なうに当たって、実態調査をしたところ、「蚕を飼育する狙いは何か」に関して

- ◎昆虫の生態を調べる
- ◎生命の神秘、生命の尊厳を学ぶ
- ◎生物環境と自然とのかかわりを学ぶ
- ◎八王子市の歴史を学ぶ
- ◎昔の人の知恵、農民の生活を学ぶ
- ◎物づくりと物を大切に作る心を学ぶ
- ◎地域の伝統文化に関心を持たせる
- ◎昔のことに対する意識を高める

などに高い関心のあることが判明した。

そのようなことから、当研究会では、小学校児童に有効な学習を検討して、蚕に関して次の項目についての授業を行ない、成果も得られた。

①蚕の飼い方についての学習と繭からの糸・絹づくりについての学習の内容

●蚕の飼い方学習のテーマ

◎自然と昆虫 ◎昆虫の特徴 ◎蚕の一生 ◎蚕の飼い方 ◎蚕の観察 ◎桑園の管理 ◎催青 ◎孵化法（掃立日の調節） ◎蚕の病気

●繭からの糸・絹づくり学習のテーマ

◎繭を精練して真綿をつくり、糸をつむぐ ◎繭を精練してづり出して、糸をつむぐ ◎繭を煮て糸を繰り生糸をつくる ◎つくった糸で織り方の基本を学ぶ ◎シルクスルーやマフラーなどの作品をつくる

②小学校の総合学習で分かったこと

およそ次の2点を挙げる事が出来る。

◎単に蚕の飼い方や糸・絹づくりをセットで体験させれば、それで事足りるという単純な考え方で参加するのでは、総合学習の目的は達成できるものではない。

◎小学校の置かれている環境、地域との関わりや学校の歴史や伝統など、地域社会と深く結びついた物づくりとは如何にあるべきか等、総合的な見方、考え方を踏まえた上で、学習に携わることが大事である。

(2)一般市民を対象とする蚕糸・絹づくりの学習

当研究会では、八王子市役所の浅川支所の一室をお借りして、下記4つの教室を開いている。

①真綿教室 繭の精練法と袋真綿、角真綿の作り方について学ぶ

②真綿加工教室 真綿から噴止真綿をつくり、ベストの作り方について学ぶ

③真綿つむぎ教室 つくしや紡糸器を用いて、真綿から糸をつむぐ方法を学ぶ

④糸繰り教室 煮繭法と繰糸法を学習し、あわせて生糸の精練法について学ぶ

上記教室に参加された一般市民の方は、1回の教室に付き、最低でも20名前後、年間約170名に達し、熱心な質問も出たりして、毎年盛況である。

なお、教室に参加された方は、何らかの形で、染織に携わっておられる人たちが多く、そのせいか、絹素材づくりをこれらの教室でしっかり学ぶことによって、改めて自らの作品づくりを見直したり、意欲的に取り組んだりしている様子が窺える。

また、養蚕・製糸と云う地域とかわる素材づくりを学ぶことによって、各地域の蚕糸・絹業に関する関心が一段と高まって来ているようである。

3. 各種絹加工技術等の開発研究

当研究会の絹加工技術研究の一に精練を挙げる事が出来る。

その精練法では、3分練り、5分練り、8分練りと云ったような選択的精練を可能にし、副蚕糸、毛羽、屑繭、緒糸と云った副産物のセリシン定着や強度や嵩高性付与、また、発酵藍の堅牢染も可能になった。

製品加工技術では、シルクスクリーンやシルクフェルト、真綿加工等に関する様々な研究が行なわれるようになり、合わせて、多種多様な絹づくりが盛んに行なわれている。

〒184-0011 東京都小金井市東町4-28-3 ☎ 042-381-5230 FAX 042-381-5240

E-mail: tamasilk@nifty.com URL: <http://homepage3.nifty.com/tamasilk/>